



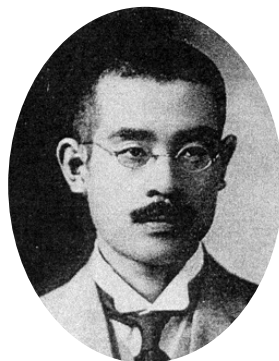
中部の

エネルギーを 築いた



シンフォニアテクノロジー(株)を
育て上げた 小田嶋 修三

鳥羽市名誉市民、鳥羽商工会議所初代会頭であり、シンフォニアテクノロジー(株)育ての親である、小田嶋修三は、明治20年10月、岩手県和賀郡に生まれた。京都帝国大学に入り、青柳栄司教授のもとで電気工学を学んだ。同級の友人には後に京都大学総長(昭和20年～26年)となる鳥養利三郎がいた。明治45年7月に卒業し、京都の電機メーカー、奥村電機商会に入り、各種電気機械の設計に従事し設計課長となった。大正6年、大手商社であった鈴木商店の造船部長辻湊から、系列会社の鳥羽造船所への勧誘があった。辻湊の人柄に惹かれて転職に応じた。

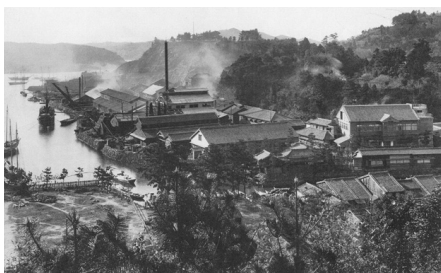


小田嶋修三
(以下シンフォニアテクノロジー(株)提供)

鳥羽造船所は、元々鳥羽藩士族たちが始めた事業で、明治29年からは財閥安田善次郎が経営を行っていたが、明治45年に事業から撤退し、三重紡績の伊藤伝七の手に移り(中央鉄工所)、さらに大正5年12月から鈴木商店の経営下に入っていた。鈴木商店では、同5年11月播磨造船所の経営を引き受け、次いで鳥羽造船所を傘下におさめ、造船事業に乗り出そうとしていた。なお安田財閥時代の明治42年7月には、自家用発電所(直流180kW)を利用し周辺地域へ電灯供給を開始していた。



辻 湊



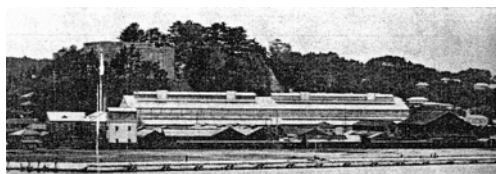
鳥羽造船所

鈴木商店系列 鳥羽造船所入社

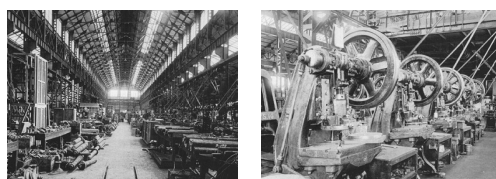
鈴木商店が経営を引き受けた頃から第1次大戦に伴う爆発的な造船ブームが生じた。船舶用電装品が不足してきたので、自前で生産する方針に切り替えた。このため鳥羽造船所に電機工場を設けて船舶用ダイナモ、モーターの製造を計画し、担当技師として小田嶋を招いたのである。小田嶋の赴任した大正6年10月14日は、鳥羽造船所が初めて建造した鉄製船「紫微丸」の進水式の日であった。小田

嶋は、京都大学電気工学科附属の電気工学講習所で2年ほど講師を担当していたが、彼の誘いで卒業生が電機工場に相次いで入社した。同7年6月、造船事業は鈴木商店系列の帝国汽船へと移った。小田嶋が赴任したところは建物100坪、機械20台程度のささやかな工場であったが、船舶用電装品だけでなく、各種の直流・交流発電機、誘導電動機などを製作し、9年1月、鳥羽造船所内の電機工場は、鳥羽

電機製作所と呼称を変えた(以下、鳥羽電機製作所と記載)。鳥羽市内への電灯供給事業では交流機に切り替えて供給力の強化を図っ



鳥羽電機製作所外観



鳥羽電機製作所内部

たが、12年5月三重合同電気に譲渡された。庶務課には、後に作家となる平井太郎(江戸川乱歩)がいて、機関誌『日和』を担当していた。

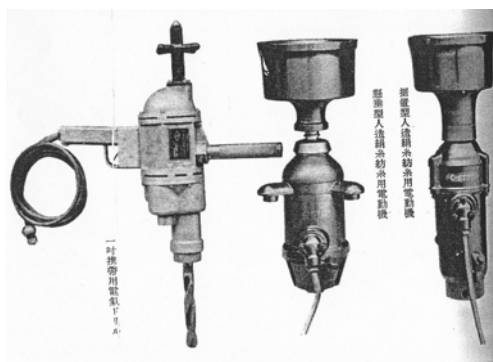


創業ころの鳥羽造船所従業員
(中央小田嶋修三、その後ろに江戸川乱歩)

神戸製鋼所電機部門の再建

大正9年7月から1年半、小田嶋は欧米の電機工場の視察に赴いた。鈴木商店の現地社員から紹介の便を得ながら、GE、WH、シーメンス、アルゲマイネなどの工場を視察し、最新の電気技術を学ぶ事ができた。帰国してみると、鳥羽電機製作所を取り巻く環境は大きく変わっていた。鳥羽造船所は同じ鈴木系列の神戸製鋼所に合併されて、神戸製鋼所鳥羽工場となっていた(10年2月)。第1次大戦が終了して造船ブームが去り、不況が続く中、小田嶋は合理化を進め、一般用の電機製品の開発に力を注いだ。

不況脱出に貢献したのは人絹紡糸用の電動機、ポットモーターの開発であった。鈴木系企業の帝国人絹(現テイジン)では、多発するポットモーターの故障に悩んでいた。海外の新知識を得て帰国した小田嶋に、改良が委嘱された。苦心惨憺の末、90ヘルツのポットモーターを帝国人絹に納入したのは、大正



人造絹糸紡糸用電動機、ポットモーター

13年であった。鳥羽電機製のポットモーターは、海外からの輸入を完全に押さえ、国内人絹工場需要の90%を独占した。開発に協力した大学時代の友人、鳥養利三郎(鳥羽電機工場顧問)は、「小田嶋さんの目のつけ処、優れた統率力、それに社員一同の方々の無私の協力」の賜だったと回想している。人絹工業が黄金時代を迎えるなか、累計25万台のポットモーターを販売し、経営再建の柱となった。

小田嶋は、昭和27年4月、ポットモーターの功績で、藍綬褒章を授章している。

昭和恐慌下の昭和2年4月、親会社の鈴木商店が倒産した。系列の神戸製鋼所も縮小を余儀なくされ、鳥羽の経済を支えてきた鳥羽造船所も閉鎖されたが、業績の良かった電機

製作所は存続した。小田嶋は3年1月に工場長となり、10年8月には神戸製



鳥羽電機製フォノモーター(赤鳥羽)



鳥羽電機製金銭登録機

鋼所の取締役役となる。鳥羽電機製作所は、小田嶋工場長のもとで赤鳥羽の愛称で知られたフォノモーター、鳥羽モートル、扇風機、掃除機、電気ドリルから金銭登録機など一般家電製品の開発・販売へと手を広げた。

戦時体制下および戦後の活躍

戦時体制が進む中、神戸製鋼所の鳥羽電機製作所は、昭和12年に陸海軍の管理工場に指定され、航空機用電装品の生産へと移行し、山田工場(宇治山田、16年)、日野工場(東京都、18年)、松阪工場(19年)などが次々に設けられた。軍需生産が拡大するなか、小田嶋は18年に神戸製鋼所の常務に就任し、敗戦後の21年12月に退任している。

戦後の事業再編のなかで、23年8月神戸製鋼所から電機部門が独立し、鳥羽工場、山田工場、東京工場の3工場をもって神鋼電機が新発足した。25年10月、小田嶋は同社顧問に就任し、再び電機製作に関わった。また38年には鳥羽商工会議所の初代会頭に就任している。温厚篤実な技術者として小田嶋は、生涯に特許12件、実用新案42件を取得した。43年10月に80歳で逝去し、同月、鳥羽市の名誉市民に選ばれた。シンフォニアテクノロジー(株)鳥羽工場の正門奥の緑地には小田嶋の



鳥羽工場



小田嶋修三之碑(筆者撮影)

業績を記念する「小田嶋修三之碑」が建てられている。
(浅野 伸一)